

エッセイ特集1

聖人伝と暴露文書の間で——ヴィクトリア時代の〈伝記〉

自伝における内奥の秘密の告白

——ジョン・アディントン・シモンズの『回想録』を手がかりに——

宮崎 かすみ

はじめに

学会から「伝記におけるセクシュアリティの扱い」という依頼を受けたとき、来たかと思った。何しろワイルドの生涯を描いた拙著では同性愛行為の具体にかなり踏み込んだ記述をしている。そこのところを期待されての依頼であろう。自分自身では、同性愛行為の具体的なことを記述するのに抵抗はなかった。参考にした文献での扱いに倣ったまでのことだ。ただ、世間の反応を一応慮って編集者には、こんなに赤裸々なことを書いても大丈夫ですかという確認はとった。編集者には、勿論です、大いに結構と太鼓判を押されたものの、世間からはかなり引かれたのは間違いない。

しかしそれよりも当惑したのは、破天荒で破滅的な人物を描いたことに対する世間の反応であった。模範になるような生涯を送ったのではない、それどころか反面教師的な人生を読まされるなんて、的な反応を多く感じたのである。日本人読者の多くにとって、伝記・評伝といえば、子供の頃、小学校の図書室に並んでいた偉人伝の類の印象しかないのだろうか。自墮落で落ちぶれた人間の悲惨な生涯の記述を読むことの面白さが、どうもこの国では根付いていないようだ。要するに英米文化圏とは違って、伝記・評伝という文学ジャンルが確立されていないようなのである。

ちなみに筆者が語ったのは、ワイルドという他者のセクシュアリティである。他者の欲望をいくら赤裸々に描こうが、書く人間が恥を晒すわけではない(はずだ)。本稿で考察したいのは、むしろ自分で自分の性的欲望を語る場合である。本来性的欲望とは、その欲望の主体によってしか語り

えないものだ。リスペクタビリティという、ことさらに慎み深さを要求する性規範が支配したヴィクトリア朝において、内奥の秘密を告白し暴露する自伝・伝記文学が隆盛を極めた。一体全体、それはなぜなのか。この疑問から出発して自伝において性的欲望を語ることの意義を概観したのち、近代的自伝の特殊形態として、性科学のテキストに収められた「症例」を検討する。具体的な手がかりとして、ジョン・アディントン・シモンズが自らの性的欲望を語った「症例」と『回想録』をひも解いてみたい。

1. ルソーの『告白』と近代の自伝

性的欲望に限らず個人が胸に秘めておきたい秘密を洗いざらい告白して、近代の自伝文学の先鞭をつけたのは、ジャン・ジャック・ルソーである。18世紀の啓蒙期に浮上してきた個人のアイデンティティという概念に対応する文芸様式として成立したのは、小説および自伝・伝記であった。小説が真実に肉薄するリアリズムと虚構性を主要な要素とするのに対して、自伝・伝記は、際立った個人の内的成長に焦点をおく記述という点では小説と共通するものの、リアリズムを通りこして真実そのものが鍵となる。他の誰でもない自分という個人が真実の自己を発見する道程にこだわる語りの様式としての「自伝」(autobiography)が確立されるのは18世紀後半、この言葉が最初に登場したのは1775年前後のことであるが、ヴィクトリア朝初頭まではあまり定着していなかった。

『告白』(1781-88)の執筆をもってルソーは、生の内奥の経験を嘘偽りなく記述した歴史上最初の人物となった。そこには好ましからざる出来事や秘められた欲望——自慰やマゾキズム、性器露出や同性愛、自らの私生児を孤児院に預けたことなど——をも包み隠さずに曝け出した。それは、ルソーが偽善と見せかけからなる社会的価値観を切り捨て、自分自身に対して完璧に誠実であることを尊重した態度の表明でもあった。

『告白』の冒頭で、ルソーは、他者とは異なりオリジナルな自分自身であることこそが個人の価値の源泉であると高らかに宣言する。そしてこのような唯一無二の自分自身の過去をありのままに記したその告白が真実であること、率直であることにとことんこだわる。「軽蔑すべき卑しかったと

きもそのままに」¹告白したからこそ、この告白には価値があるのだと誇らしげに語るのである。

この赤裸々な自己暴露の書はヴィクトリア朝人にとっていささかの居心地の悪さはあれど、自伝文学の先達として圧倒的な存在感を誇っていたのは否定できない。これを読むためにフランス語を学んだジョージ・エリオットのような熱烈なファンがいた一方、あまりに容赦ない暴露に当惑した読者も多かった。² とはいえ、これ以降、自身についての率直かつ嘘偽りのない告白は、この種の語りには不可欠なものとなっていった。作法に反するとはいえ、迫真性と迫力が語りにもたらされるメリットには抗えなかったのである。

ところで、なぜこの時代にリスペクタビリティとは相容れない自己暴露が受け入れられていたのだろうか。³ 自伝的なナラティブにあるような自己理解は、19世紀の中流階級人にとって、自己の主体性を表現するための要諦であった。近代になって共同体や社会的地位・身分から切り離された個々人は、自分が何者であるかを自分自身で定義しなくてはならなくなった。こうして近代西欧社会において、個人を特定させる要素は動機、衝動、個人的欲望などといった精神的・内面的なものへと移行していったのである。自己を定義するものとしての個人のアイデンティティとは、真実にして嘘偽りのない「内面的自己」を意味するようになった。こうして内省と自己の暴露は、教養ある中流階級の勃興によって社会的に広く支持されるようになる。さらに、社会を個人と敵対するものとして措定するロマン主義の精神は、個人に対して社会と対決するなかで独自の感受性と内的自己を啓発せよと促した。このようなブルジョア文化において、自己に誠実であること・偽りがなくということという理想が突出した重要性を帯びてくる。そしてこの誠実さの上に内省、自己観察、自己表現がなされなくてはならないとされた。好ましいものだけでなく悪しき情念をも含めた感情がさまざまに交錯する心性は、健全な人間性の発達にとって必要なこととみなされた。

こうしてリスペクタビリティが強い慎み深さ・上品ぶりとは相いれない内容の自伝的告白を、許容するどころか歓迎さえするという人々の意識が醸成されていった。リスペクタビリティが表向きは抑圧し、無視し、排

除するものを、敢えてさらけ出すことが、じつは正しいことでもあったのである。そして、こうした自己暴露を正当化していたのが、自己に誠実であることを至上とする価値観であった。

2. ルソーの末裔たち——性科学における「症例」という名の自伝

その後も大いに繁栄した自伝文学であるが、性にまつわる事柄についてルソーに並ぶ豪胆な追従者をその後陸続と輩出したとは言いがたい。むしろルソーの後継者は、19世紀後半から台頭してきた性科学の文献に多数見出されるのである。性科学の文献は学者が患者から集めた自分の性的履歴を語った多数の手記——「症例」——からなっていた。この手法を確立したりヒャルト・フォン・クラフト-エビングの『性的精神病理学』(*Psychopathia sexualis*, 初版1886年)は、19世紀の性病理学および性科学の金字塔とも言えるが、ここには自らの逸脱した性に悩む患者や文通者たちから寄せられた多数の「症例」(case)が収められている。性科学においては、それらの症例を分類して、考察する「症例研究」が主流であった。ある意味で、こうした症例は、近代の自伝文学の特殊形態とみなすこともできよう。現に、イギリスでハヴロック・エリスとジョン・アディントン・シモンズが協同して、後に『性的倒錯』(1897)として結実する研究のために集めた症例を、彼らは「伝記」と呼んでいた。⁴

この症例という記述は、小説や伝記が誕生したのと同じ時代に誕生した。フーコーの見取り図に従えば、パノプティコンとして立ち現れた規律・訓練の権力が個人を一つの「事例・症例」へと仕立てあげ、それを認識の対象としたことにはじまる。その端的な例は試験である。「記述され評価され測定され他の個人と比較された」⁵試験による個人の事例は、精神医学においては「症例」という「個人別の記述と生活史的な物語」となったというのである。フーコーはこの現象を、性的逸脱者が医学権力によって病理の烙印を押され、権力の支配下に取り込まれた過程として否定的に見るが、クラフト-エビングが集めた2万通にもものぼる自伝的記述を調査したオーステルフイスは、エビングの協力者として手記を寄せていた人々がこの作業に主体的に関わり、誇りをもって語っていたことを明らかにする。そし

て当事者たちの赤裸々な告白がもつ迫力こそが性科学の理論の発展に少なからず寄与したと言うのである。

3. ジョン・アディントン・シモンズの「自伝」

本稿では字数も限られているので、シモンズの自伝からその種の告白を拾ってみたい。シモンズは本来ならエリスと並ぶ『性的倒錯』の共著者であった。エリスに協同研究をもちかけてイギリスで初となる同性愛に関する性科学研究書の刊行を持ちかけたのはシモンズであったし、性科学の知見でもエリスの先を行っていた。しかし彼の死後、家族が彼の名前を出すことを拒否したために『性的倒錯』の著者としての彼の名は抹消されてしまった。この準備のために二人の間でやり取りされていた手紙からは、初版に掲載された症例を収集したのも、クラフト-エビングの手法を参考にして質問票を作り上げたのもシモンズだったことがわかる。⁶ 例えば93年1月、シモンズが12人の自伝を集めたという報告を受けてエリスはこう述べる。「イギリスで集められたこの種の自伝はまだ活字にされていないし、それが大陸のものに似ていると想定する理由もない」から、「症例はいくら多くても多すぎるといえることはない」⁷と書いている。さらにエリスは「自分が知る限りイギリスの医学的専門雑誌にはただの一つもイギリス人のセックスの症例が載ったことはない」と誇らしげに付け加えている。症例収集が佳境に入ってきた矢先、二人の文通は突然途絶えた。4月にシモンズが急死したからである。

シモンズは、友人らの自伝を収集したのみならず、自らも自伝を書いた。一つは長大な作品として、もう一つは自分が考案した質問票に従った症例として。後者は「症例18」として『性的倒錯』に収められている。エリスさえウルリヒスをまだ読んでいなかった時点で、すでにウルリヒスをはじめとする大陸の性科学に精通していたのがシモンズだった。彼こそが水面下でイギリスの性科学事情を牽引していた影のリーダーなのだった。

シモンズが『回想録』(*The Memoirs*)と題する自伝執筆に着手したのは1889年のことである。これはもともと刊行する意図なく書かれたものであった。この自伝のために赤裸々に告白する意気込みを彼はこう述べる。

「もし友人がこれを読んだら、自分がこの文章を書くために払った犠牲を思い涙してくれるだろうし、人間というものを学ぶ者なら、この文章を書くにあたって精一杯誠実であろうとした努力を評価してくれるだろう」。⁸

4年後に控える死の予感があったのか、彼は同性愛者として煩悶と苦闘のうちに手さぐりで歩んできた人生に、一貫した意味を与えるためにこの自伝的告白に駆り立てられたようだ。人生を意味あるものにするとは、生きられた人生を物語にすることであった。以下で、率直であることに命をかけて彼が書いた人生の履歴を垣間みたい。

シモンズは幼い時から虚弱で神経質な子供だったが、幼少時には後年の性癖をうかがえるものはなかった。シモンズが在籍したハーロウ校は同性愛が蔓延することで悪名高かったが、彼はここでその洗礼を受けたわけでもなかった。だが長じて結婚を考える頃には、その性向をはっきり自覚するようになっていた。その頃彼は頭と眼の神経疾患に悩み性器にも障害が出ていたが、同性への満たされぬ欲望のせいだと考えていた。医者のアドバイスに従い気が進まぬまま名家出身の女性と結婚するも、女性との肉体的接触には「何か吐き気を催させるものがあったし、私の場合、同棲生活はただ自然的欲求を機械的に除去するためのものというにすぎなかった」⁹と告白する。さらに「女性との交渉に満足を見出せない」性的欲求をもって生まれてきたのだとも言う。¹⁰

妻が夫の性向を知ることになるのは、結婚して5年後のことだった。シモンズは10歳年下のハーロウ校の学生、ノーマンと恋に落ちた。少年の頻繁な訪問に疑問を感じた妻に、シモンズは正直に自分の性向を告白した。妻は性の営みを嫌悪していたので、彼女はシモンズの青年への感情と交際を受け入れた。シモンズとノーマンの関係は当初は精神的なものだったし、最後の所（肛門性交と思われる）には行かないと決めていたというものの、裸体のノーマンとベッドを共にしたときの記述があることからその関係は肉体的だったとみてよい。¹¹

1877年に彼は家族と共に療養のため、スイスのダヴォスに移住した。そこを拠点に頻繁にイタリア旅行に出かけていた彼は、81年にヴェニスでアンジェロ・フサートというゴンドラ漕ぎと出会い、恋に落ちる。浅黒い肌の当時24歳の若者には、内縁の妻と娘がいた。貧しすぎて結婚もできな

いというアンジェロにシモンズが職の世話をしたお蔭で彼は結婚できた。「社会のしきたりに照らせば狂気と罪において始まった関係」¹²ではあったが、その交際によってアンジェロは経済的な利益を得、シモンズは精神の安定を得た。『回想録』執筆時点でこの交際を、シモンズは満足げに振り返りこう総括した。「私の異常な欲望がなかったなら、社会的地位、教育、国民性と肉体においてこれほどかけ離れた人間と知り合うことはなかっただろう」。

『回想録』を執筆中の1889年、シモンズは、自分がこの自伝を書いた動機を表明する。自分と同じような病に悩む者らが一人ではないことを自覚し、ともすれば社会的に抹殺されるかもしれぬ重荷にあえぐ者でも、忍耐と活力を要する傑出した職業の道を追求することができることを知らしめたいのだと語る。¹³ もう一つの目的は、生涯にわたる欲望との闘いとそのによる緊張と神経疲労のためにいつ狂気に陥るかわからないという恐怖を常に抱く彼が、その時のために自分の行為を説明する言葉を残しておきたいのだと。「そうである以上、今自分が行っているこの分析が、苦痛を伴い、これからしなければならぬ告白が尋常ならざるものになるであろうが、私は決してひるむことはない」。

この自伝の掉尾で、シモンズは家族に対する思いを述べる。妻への愛は語られないものの、彼は妻公認の奇妙な二重生活を、少なくとも娘たちには愛情を注いで「立派に」続けてきた、と。しかし、率直かつ正確な自分語りの結末を控えて、家族を思うときだけは、この特殊な情熱とともにあった自分の人生に痛恨の情が加わると告白する。¹⁴ そして、ダヴォスに居住する14年間に書き上げた著作のタイトルを羅列し、これだけの仕事をこなした自己管理と強靱な意志を誇る一方、その間自分の深いところに根差す倒錯した性本能を意識しないことは一度たりともなかったと言う。だからこそこんな長い告白を書いたのだ。「これは奇妙な人生履歴である。とはいえ自分が想定するよりも、もしかするともっとよくあることなのかもしれない」。というのもこの文章を書いたのちに大陸で刊行された多数の性科学文献——もちろんクラフト-エビングも含む——を最近読んで、自分のものは無数にあるものの一例にすぎないことがわかった、と注に書き記している。

シモンズの遺志を継いだエリスは、1895年のワイルド裁判直後の逆境のなかで苦労したあげくによくエリスとシモンズの名を共著者として冠した『性的倒錯』の初版を1897年に刊行した。しかし、彼の同性愛を忌み嫌っていた未亡人は、彼の名が記された『性的倒錯』の刊行は彼の名誉を損なうとして、著作権管理人のホレイショ・ブラウンを介して出版を妨害させ、刊行されたのちにはブラウンはできる限りの著作を買い上げその殆どを廃棄した。¹⁵ 他方、出版を意図せずに書かれた『回想録』は死後、ブラウンが管理していたが、後にロンドン図書館にこの原稿を遺贈した。紐で結わえられ、緑の紙の箱に入った手稿には「死後50年間は刊行しないこと」というメモが付されていた。¹⁶ 偶然この手稿の存在を発見したフィリス・グロスカーズが編纂してこれを刊行したのは、1984年のことである。苦悩する同性愛者が読んで勇気づけられるというには、遅きに失していた。

そもそもシモンズがエリスにこの協同作業をもちかけたのは、医学関係の書き手としてのエリスの専門的な権威を借りることで、世間から真面目に扱ってもらえるだろうことを期待したからだった。¹⁷ 医学的テキストの体裁を装うことで、倒錯者が犯罪者などではない、倒錯者である前に普通の人間であることを広く世間にアピールしたい。そして社会的・法的な立場の改善に寄与することを二人は夢見た。その志半ばにして逝ったシモンズが、倒錯と病理に彩られた人生の秘密の真実を率直に語った自伝は近年まで日の目を見なかったものの、「症例18」としてエリスに提供した自伝的記述は、『性的倒錯』のなかで圧倒的な詳細さと存在感でもって異彩を放ち、同じ性向に悩む者たちに力と希望を与えたことは想像に難くない。

シモンズ自身が書いた症例の末尾を紹介して、本稿を終えたい。

…男性との性的接触は彼にとってまったくもって健康的なことであると確信する。こうした関係によって、肉体的、精神的および知的エネルギーが充満するのを彼は感じている。しかも他の誰に対しても害をなすことはない。文人として彼は、自らがもつこの感情を表出する芸術上の表現を自らに閉ざしてきたことを後悔している。彼は自分の行為(男性との恋愛、挿入宮崎)において道徳的な誤りなど何もないと感じている。彼のような者に対してとる社会の態度は間違った道徳律に拠って立つ、理にかなわぬ謬見と考えるものである。¹⁸

この一節から、自らの秘密の性的欲望について赤裸々にありのままを語る勇気と力は、それを秘密にすることを強いる社会の偏見を根絶せしめんとする使命感によって支えられていたことがわかるのである。

注

- 1 ジャン・ジャック・ルソー『告白(上)』小林善彦訳、『ルソー選集1』(上)、白水社、2006年、4ページ。
- 2 Peter Gay. *The Naked Heart. Vol. 4, The Bourgeois Experience: Victoria to Freud.* New York: Oxford University Press, 1995, p. 106.
- 3 この説の記述は主に以下に拠る。Harry Oosterhuis. *Stepchildren of Nature: Krafft-Ebing, Psychiatry, and the Making of Sexual Identity.* Chicago: The University of Chicago Press, 2000, pp. 215-240.
- 4 Sean Brady. *John Addington Symonds and Homosexuality: A Critical Edition of Sources.* London: Palgrave Macmillan, 2012.
- 5 ミシェル・フーコー『監獄の誕生——監視と処罰——』田村俶訳、新潮社、1997年、188ページ。
- 6 Brady. *op.cit.*, p. 251.
- 7 *Ibid.* p. 246.
- 8 Phyllis Grosskurth ed. *The Memoirs of John Addington Symonds: The Secret Homosexual Life of a Leading Nineteenth-Century Man of Letters.* Chicago: The University of Chicago Press, 1984, p. 29.
- 9 *Ibid.* p. 157.
- 10 *Ibid.* p. 158.
- 11 *Ibid.* p. 209.
- 12 *Ibid.* p. 276.
- 13 *Ibid.* p. 183.
- 14 *Ibid.* p. 279.
- 15 Sean Brady. *op.cit.*, p. 32.
- 16 Grosskurth. *op.cit.*, pp. 11-12.
- 17 Havelock Ellis and John Addington Symonds. *Sexual Inversion: A Critical Edition.* Ivan Crozier ed. (London: Palgrave Macmillan, 2008), p. 59.
- 18 *Ibid.* p. 147.